



水槽毎の試験内容の説明を受ける

海のない長野県では、信州サーモンと大王イワナが、地産地消と地場産業の振興、ブランド化による地域おこしのためにとの熱い思いで取り組まれていく。信州に来てまで海のマグロではない。一般的なアユ、ヤマメ、ウグイ、ワカサギの増殖事業に加え、刺身にして美味しい大型高級魚、丈夫で飼いやすい魚がほしいとの願いから、10年をかけて開発された。平成16年から稚魚の供給を開始し、平成26年度には42戸の専業漁家が330tを出荷している。

試験場の説明資料では、試験場で開発したニジマスに、ヨーロッパ原産のサケ科の淡水魚、ブラウントラウトをバイオテクノロジー技術で交配し、誕生したのが信州サーモンである。全てメスであるが、成熟しないため、産卵をせずに3年間成長し続け、従来のニジマスの倍以上の大きさまで成長することである。

大王イワナの改良については、宮城県が実用化した技術をベースに取り入れ、2年で技術を確立し供給している。成魚を取り扱う飲食店は、現在県内外で509店舗が登録されている。

猿ヶ石川のアユの奇形について伺ったところ、短矩症（たんくしよ）とのこと。人工種苗魚で多く見られる症状で、対策としては孵化（ふか）後の餌にEM菌を添加した飼料を給与することも一つであるが、完全ではなく、稚魚の購入の際に病歴カードの添付を義務付けることも必要とのことである。

その他に、傷を負った魚体については、病



水産試験場で内水面漁業等の説明を受ける

【調査日】平成28年2月17、18日
【調査・研修箇所】長野県安曇野市 長野県水産試験場 有限会社大王農場

【議員】多田 勉 多田 誠一 萩野 幸弘 新田 勝見 菊池 由紀夫

長野県における内水面漁業について
躍進とおの・遠野一新会合同会派

原菌による冷水病で、特にも友釣りの種アユが菌を持っていくと、寄ってきたアユに感染し病根が顕著に表れる。しかし、具体的対策は確立されていないとのことである。

長野県の水産試験場が長い時間をかけ、取り組み、実現した成果

【その他の研修事項】大王わさび農場における100年のわさび栽培について

は、しっかりと地域に根ざし、産業として確立していることを実感した。



市営堆肥センターのストックヤード

大野平キャトルセンターは平成26年4月より周年受け入れ施設として供用開始され、現在哺育・育成（月齢0〜9ヶ月）300頭規模に対して46頭、繁殖（10ヶ月以上）100頭規模に対して117頭が預託管理されていた。

哺育舎はセンサー管理による人口哺乳施設が整備され、温度管理施設も充実している。最適な環境にも関わらず、利用頭数が少ないのは利用料金（一日600円）なのか、PR不足なのか、畜産農家と関係機関との利用に向けた話し合いが求められる。

繁殖については、受け入れ規模を上回っており、今後も増加することが予想されるのであれば、他の施設も含めた利用計画の見直しが必要ではないか。

石羽根キャトルセンターは、平成27年10月より越冬受け入れ施設として供用開始された。現在は受け入れして間もないため300頭規模に対して41頭が預託管理されている。

除染作業が終了し、越冬粗飼料生産が本格化するの、28年度からとなることから、キャトルセンター間の利用調整も念頭に置きながら預託頭数の増頭にに向けた取り組みが課題となる。

市営堆肥センターの昨年度実績は、受け入れの原料堆肥が3300tで、製品として2800tの販売となっている。今年度も同じ位の数量の見込みであるが、製品化した堆肥のストックヤードが満杯となっており、原料堆肥の受け入れをストップしている。原因は、販売堆肥の主流であるバラ堆肥の出荷時期が4月から6月に集中す



環境整備部からの聞き取り状況

【調査日】平成28年2月9日
【調査・研修箇所】大野平キャトルセンター 石羽根キャトルセンター 市営堆肥センター

【議員】菊池 充 多田 勉 照井 文雄 荒川 栄悦 細川 幸男 多田 誠一

施設の利用実態と今後の耕畜連携について
産業建設常任委員会

するため、年間を通しての生産が出来ない状況にあるとのことであった。

市がJAと進める一億円販売園芸団地構想や低コスト生産、環境保全対策等耕畜連携強化には、周年の受け入れ体制のためのストックヤードの増設が急務となっており、財政面での課題はあるが、トータル的な判断の中からは第2次総合計画の前期基本計画での早期実施が求められていると感じた。